

沈黙に向き合う

沖縄戦開き取り47年

石原昌家

〈16〉

糸数住民が壕入り口で殺された。「本当に日本は勝った害されてから1カ月ほどたつたとき、住民2人が「日本国万歳! 日本国万歳!」と叫びながら壕入り口に近づいてきた。重傷患者として壕内にいた元日本兵の日比野勝廣さんの証言だ。

2人は銃撃されることなく、壕内に迎え入れられ、手荷物が壕内にあつたと女性から聞き、息子を探し出した。知念さん



氏が当選 玉城村長選

玉城村長選挙の結果、玉城村長に玉城氏が当選した。玉城氏は、選挙戦で「人殺し」の汚名を払った。玉城氏は、選挙戦で「人殺し」の汚名を払った。玉城氏は、選挙戦で「人殺し」の汚名を払った。

地温の温度 (22日) 一人殺しのうわさを流され、Tさんが落選した時の玉城村長選の結果を報じる「琉球新報」の記事(1962年4月23日付)

親族でもスパイ視

選挙で「人殺し」の汚名

糸数アブチラガマ②

は壕内にいた妻子と孫の救出が目的だった。また壕内にいた住民の代表格だったSさん(お前のちに殺された)が、壕内の断崖から下につつたこともあり、彼を説得して住民全員を救出できると思っていた。

住民、柱に縛り付け

壕内に入った比嘉さんと知念さんは集まった人たちが本当のことを話した。日本が勝つたというのはうそ

皆殺し作戦を取った。このため中々に重症患者や住民の高齢者が相次いで亡くなった。

このため8月22日、負傷兵や住民らは壕の外へ出るこ

知念さん(壕に)入って見たので、比嘉さんは隙を見て逃げ出し、日本軍が掘った民家裏の出入り口から壕の外へと無事脱出した。

すると、そこには米軍の監視兵がおり、ジープで収容所まで連れて行かれた。比嘉さんは壕内について米兵から尋問を受けた。日本兵と住民はそれぞれ何人か見かねた兵事主任のTさんが

風説で村長選落選

兵事主任だったTさんは戦後、役員職員として働き続けた。そしてTさんは1962年4月22日投票開票の玉城村(現南城市)の村長選挙に立候補した。Tさんは助役だったこともあり、対立候補よりも優勢な立場で、当選確実とみられていた。

ところが思いもかけぬことが起きた。対立候補の運動員が演説会で「人殺しに村政は任せられない」とTさんの攻撃を始めたのだ。戦時中に糸数壕の入り口で3人の住民が銃殺された事件を持ち出し、殺したのはTさんだと言いつつ、このため選挙戦は一気に形勢が逆転してしまう。Tさんは対立候補に34票差を付けられて落選した。

Tさんはつわきになる根拠に思い当たることが二つ

あった。一つは自身が召集令状の発送を担当する兵事主任だったことだ。さらに戦後、集落の長老格だった義兄の山十郎さんから銃殺された3人の遺族への謝罪を促されたことを挙げた。

「十郎さんから君は役員職員でその壕にいたのだから、遺族におわびしに行きなさい」と言われた。『自分は誰も殺してないから行かない』と言い張った。だが長老の説得に根負けして、3人の遺族の家をおわび行脚した」とTさんは振り返る。

Tさんは選挙が終わった後、うわさを流した相手候補の運動員に「有権者全員にそういうことを言いふらしたのはいくらもなかったというわび状を出せ。さもなければ名誉棄損で告訴する」と迫った。

しかし運動員は「わび状」を出さなかった。このためTさんは告訴して裁判で争った。結果はおわび行脚を促した義兄の証言が得られたことなどで勝訴した。

疎開学童だった知念太蔵さんが、帰郷後の集落の様子に異変を感じたのは、住民の間にもたらした戦争の傷跡があまりに深かったからだ。

で、実際は米軍が制圧し、住民は収容所に入れられていたことを説明した。

するとSさんは叔父の話に疑念を抱いた。「敵が囲いのないところに収容して住民を野放しにするはずがない。そんなバカなことがあるか。これは敵のスパイになってるんだ」と感じました。

壕内で2人から事情を聞いた上妻伍長は、激高して「貴様らはスパイだ!」と斬つてやる!と言いつつ、Tさんは、このことで比嘉さんから逆恨みされること

事主任のTさんは、比嘉さんが筆息死しないかと心配になった。このため上妻伍長に「あんたがすぐに殺そうとするから逃げたんです。私の知人だし、殺さない約束するならば彼を呼びましよう」と提案した。

殺さないという約束を取り付け、比嘉さんを説得して「二重壕」から上がってもらった。比嘉さんと知念さんはすぐに柱にロープで縛りつけられてしまった。

Tさんは、このことで比嘉さんから逆恨みされること

知念さんは「妻子はここにいるのだから、生きるのも死ぬのもみんなと運命を共にする」とあきらめ、1カ月ほど壕での生活を余儀なくされた。米軍の生き埋め攻撃の後、住民はなんとか入り口の隙間を見つけて、夜間に外へ出るように

壕内に入った比嘉さんと知念さんは集まった人たちが本当のことを話した。日本が勝つたというのはうそ

皆殺し作戦を取った。このため中々に重症患者や住民の高齢者が相次いで亡くなった。

このため8月22日、負傷兵や住民らは壕の外へ出るこ

知念さん(壕に)入って見たので、比嘉さんは隙を見て逃げ出し、日本軍が掘った民家裏の出入り口から壕の外へと無事脱出した。

すると、そこには米軍の監視兵がおり、ジープで収容所まで連れて行かれた。比嘉さんは壕内について米兵から尋問を受けた。日本兵と住民はそれぞれ何人か見かねた兵事主任のTさんが

風説で村長選落選

兵事主任だったTさんは戦後、役員職員として働き続けた。そしてTさんは1962年4月22日投票開票の玉城村(現南城市)の村長選挙に立候補した。Tさんは助役だったこともあり、対立候補よりも優勢な立場で、当選確実とみられていた。

ところが思いもかけぬことが起きた。対立候補の運動員が演説会で「人殺しに村政は任せられない」とTさんの攻撃を始めたのだ。戦時中に糸数壕の入り口で3人の住民が銃殺された事件を持ち出し、殺したのはTさんだと言いつつ、このため選挙戦は一気に形勢が逆転してしまう。Tさんは対立候補に34票差を付けられて落選した。

Tさんはつわきになる根拠に思い当たることが二つ

あった。一つは自身が召集令状の発送を担当する兵事主任だったことだ。さらに戦後、集落の長老格だった義兄の山十郎さんから銃殺された3人の遺族への謝罪を促されたことを挙げた。

「十郎さんから君は役員職員でその壕にいたのだから、遺族におわびしに行きなさい」と言われた。『自分は誰も殺してないから行かない』と言い張った。だが長老の説得に根負けして、3人の遺族の家をおわび行脚した」とTさんは振り返る。

Tさんは選挙が終わった後、うわさを流した相手候補の運動員に「有権者全員にそういうことを言いふらしたのはいくらもなかったというわび状を出せ。さもなければ名誉棄損で告訴する」と迫った。

しかし運動員は「わび状」を出さなかった。このためTさんは告訴して裁判で争った。結果はおわび行脚を促した義兄の証言が得られたことなどで勝訴した。

疎開学童だった知念太蔵さんが、帰郷後の集落の様子に異変を感じたのは、住民の間にもたらした戦争の傷跡があまりに深かったからだ。

(沖縄国際大学名誉教授) (次回は5月16日掲載)